

June 28, 2026

血と汗と涙 ヘブル 12:1-3

12:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。

12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。

12:3 あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。

偉大なことは、簡単には成し遂げられません。そこにはかならずといってよいほど、「血」と「汗」と「涙」があります。「血」は「犠牲」、「汗」は「労苦」、そして、「涙」は「祈り」を表します。

一、イエスの「血」と「汗」と「涙」

この世で最も偉大なものは、イエス・キリストが成し遂げてくださった救いです。イエスは全能の神なのだから、人類を救うことなど簡単なことだと言う人がいるかもしれませんが、決してそうではありません。神はきよいお方です。罪は神のきよさを汚し、神の正義を踏みにじり、神の愛に背くことです。そのために、私たち人間と神との関係が断たれ、人と人との互いの関係も壊れ、傷つき、社会は混乱したところ、世界は人々が争い合う場となりました。

この罪の問題が解決されない限り、私たちの救いはありませ

ん。罪の問題を解決する当然の方法は、罪に対して審判をくだすことです。それが、神の正義にかなった方法です。しかし、それでは、誰一人救われることはありません。そこで、罪を犯した者たちをあわれんでくださった神は、私たちに救うために大きな犠牲を払ってくださいました。それは、ご自分の御子を人として世に遣わし、御子に私たちの罪の裁きを引き受けさせるというものでした。御子は人となり、「イエス」と名付けられ、時が満ちて、救い主「キリスト」として、ご自分を世に現されました。人々はイエスの教えに感動し、多くの人がイエスに付き従いましたが、群衆の多くはイエスを「スーパースター」として扱い、イエスをこの世の「王」の一人にしようとしました。

しかし、イエスは、人々の喝采を受ける華やかな道ではなく、人々から侮辱され、嫌われる道をあえて選ばれました。イエスは、父なる神のみこころに従って、聖書の預言のとおり、「苦難のしもべ」として歩まれました。ヘブル 5:7 には、「キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました」とあります。十字架を前にしてイエスはオリーブ山のふもとにあるオリーブ畑の一つ「ゲツセマネ」というところに行かれ、そこで夜を徹して祈られました。ルカ 22:44 には、「イエスは苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた」とあります。人の体は、極限の状態になるとき、汗に血が混じることがあるのだそうですが、イエスは文字通り「血の汗」を流す苦しみを体験されたのです。

イエスは十字架ではもっと大きな苦しみを味わい、「神の子

羊」となって、血を流されました。私たちはイエスの苦しみと、その血によって罪の赦しを得ています。イエスの死によって永遠の命に生かされています。私たちの救いは、文字通り、イエスの「血」と「汗」と「涙」によって成し遂げられたものなのです。

二、教会の「血」と「汗」と「涙」

十字架の死から三日目にイエスは復活され、40日後に昇天されました。それから10日して、聖霊が弟子たちに降り教会が生まれました。エルサレムで始まった教会は、わずか一世代のうちにローマ帝国の主な町々に建てられ、やがて、帝国内のいたるところに広がりしました。

すると、ローマ帝国は教会を迫害し始め、多くの殉教者が生まれました。パウロもペテロもネロ皇帝のもとの迫害で殉教しました（66-67年）。ローマ皇帝はクリスチャンたちをローマの競技場に送り、猛獣を放って食い殺させ、それを見世物にしました。アンティオキアのイグナティオスは、捕まえられローマへ護送される道中で手紙を書き残しましたが、その中に「私はキリストの小麦です。猛獣の歯で噛み砕かれて純潔なパンとなるのです」と書いています（107年）。スミルナのポリュカルポスは86歳という高齢で捕らえられたとき、信仰を捨てれば助けてやると言われましたが、「86年間私はキリストに仕えてきましたが、主は一度も私を裏切りませんでした。どうして私が主を裏切ることができるでしょうか」と言って火炙りの刑を受けました（155年）。ユスティノスは、哲学者でしたが、クリスチャンになり、信仰を弁護する論文を書き、ローマ皇帝にも手紙を書き送った人です。ユスティノスはのちに告発

され、首をはねられ殉教しました（165年）。その他、数え切れない人々が信仰のために血を流しましたが、それで信仰が途絶えたり、教会が消えていき、福音がストップしませんでした。むしろ、クリスチャンの数が増え、教会が次々と誕生しました。カルタゴのテルトゥリアヌスが『護教論』（アポロゲティクス）に「殉教者の血は、キリスト教徒の種子である」（*Semen est sanguis christianorum*）と書いたとおりでした。

初代教会ばかりでなく、教会は、新しい土地に広がっていくたびに、抵抗に遭い、クリスチャンはいわれのないことで攻撃されました。無神論や共産主義、また、独裁的な政府、軍事政権によってクリスチャンが集まることが禁じられたり、制限されてきました。今も、そうしたことが行われています。しかし、教会は「血」と「汗」と「涙」によって苦難を乗り越えてきました。

今年は、アメリカ建国 250 周年ですが、同時にアメリカでの日本人宣教 150 周年の年でもあります。アメリカ建国から 100 年して日本人への伝道が始まったのは興味深いことです。最初の日本からの移民はアメリカを「出稼ぎ」の場所と考え、アメリカの社会に馴染みませんでしたし、日本から仏教を持ち込んでおり、クリスチャンになる人は多くはありませんでした。しかし、ひとにぎりの日本人クリスチャンでしたが、彼らの熱心な伝道によって、ハワイやカリフォルニアの各地に教会が建てられるようになりました。

ところが、太平洋戦争が始まり、日本人はアメリカの敵国人となってしまいました。そのため日本人は、カリフォルニアのマンザナーやトゥーリーレイク、アリゾナのポストンやヒラリバーなど、先住民居住区のある辺鄙なところに建てられ、有刺

鉄線で囲まれた強制収容所に送りこまれました。何家族もが一つのバラックに押し込められ、夏は暑く、冬は寒い過酷な生活を強いられました。また、アメリカで生まれた二世の若者には、アメリカへの忠誠の証しに兵役が課され、ヨーロッパの戦線に送りこまれました。

戦争が終わって、人々は収容所から解放されましたが、収容所に入る前には、それまで持っていた財産は奪われたり、安値で買い叩かれていましたから、収容所をでるときは僅かなものしか持っていないでした。まだ元気だった一世と兵役から帰ってきた二世たちは、自分たちの生活もままならない時でしたが、自分たちのことはさておいて、戦争中閉じられていた教会の扉を再び開き、教会再建のために汗を流しました。私はカリフォルニアではじめてそうした「日系人クリスチャン」に出会い、その人たちの犠牲と労苦と祈りに触れました。そして、一世、二世によって築き上げられたものを守るだけでなく、さらに発展させ、それを次の世代に引継ぎたいと願い、働いてきました。テキサスにはカリフォルニアにあるような日系人社会はありませんが、この地の日本人の多くが福音を聞き、イエス・キリストを信じる者になって、カリフォルニアの一世や二世の人たちが果たしたような役割を果たして欲しいと祈っています。

三、アメリカの「血」と「汗」と「涙」

私たちの救いはイエスの「血」と「汗」と「涙」によって成し遂げられ、教会も「血」と「汗」と「涙」によって建てられました。同じように、アメリカも「血」と「汗」と「涙」によって建てられ、成長してきました。独立戦争では1万2,000

人、南北戦争では 62 万人、第一次世界大戦では 11 万 6,516 人、第二次世界大戦では 40 万 5,399 人、朝鮮戦争では 3 万 6,574 人、ベトナム戦争では 5 万 8,220 人の戦死者がありました。合計するとおよそ 125 万人になります。独立戦争でも南北戦争でも、戦争に伴う疫病などで多くの人々が亡くなっていますから、戦争に関連しての死者はもっと多いと思います。また、9.11 のテロではおよそ 3,000 人が犠牲になっています。こうした人々の数を加えると膨大なものになります。

また、広大な大陸は西部開拓によってアメリカのものとなりました。簡単な地図しかないところを幌馬車に乗って進んでいき、朝から晩まで家族総出で働き続けた開拓者の労苦には量りしれないものがあつたでしょう。

そして、アメリカはいつの時代も、祈りによって導かれてきました。劣勢だった大陸軍を率いたジョージ・ワシントンは常に神の助けを願って祈りました。冬のバレーフォージでは食糧が不足、兵士たちは凍傷に苦しみました。その時のワシントンの祈りの姿を描いた有名な絵は、後の時代に描かれたものかもしれませんが、ワシントンは大統領引退後も、毎日決まった時間に祈りの時を保った人でしたから、彼が常に祈る人であったことは間違いのないことです。アメリカの素晴らしいことは、神への祈りによって支えられ、導かれていることにあります。これは 250 年ののちも、次の世代にひきついでいかなければならないものです。

きょうの箇所には「自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか」とありますが、クリスチャンの「競走」は、「リレー」競走のようなものだと思います。「駅伝」は日本独特のものですが、「駅伝」のようなもの

です。それは、ひとりで全部を走りきるのでなく、それぞれが自分の区間を走って、次の人にバトンや襷を渡していく競走です。アメリカは1776年に独立するとき、植民地時代から引き継がれてきた信仰のバトンを受け取りました。独立の後、47代の大統領が立てられましたが、「建国の父たち」から襷を受け取ってきました。2000年になって、アメリカでも今まで大切にされてきた信仰的なものが崩れてきました。そのような中で私たちは、受け継いできたものを次の世代に手渡す役割を果たしたいと思います。それは、神のために、家族のために、また、アメリカのために、「血」と「汗」と「涙」を流すこと、つまり、犠牲と労苦と祈りをいとわないという生き方です。

私たちの信じるイエスは、「ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、……ご自分に対する反抗を耐え忍ばれた方」です。また、私たちは、イエスに従い、良い模範を残してくれた「雲のような証人」、多くの信仰の先輩に取り囲まれています。そのことに励まされ、さらにイエスを仰ぎ見て、自分に割り当てられた競走の区間を最後まで走り抜きたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、きょう私たちは、救いを成し遂げてくださったイエスと、イエスを信じ、イエスに従って信仰の道のりを走り通した方々を覚え、それらの方々の「血」と「汗」と「涙」を振り返りました。私たちを彼らの犠牲と労苦と祈りにならうものとし、それらを次の世代に引き継ぐ者としてください。信仰の創始者であり、完成者であるイエス・キリストのお名前です。祈ります。